秋田県　令和3年度 英語教育改善プラン推進事業

取組：拠点校・協力校英語授業改善事業を通じた小中高一貫した英語コミュニケーション能力の強化

当該地域の特性等を踏まえた課題分析の視点

本県英語教育の課題は、校種移行に係る学年間の「英語が好き」と答える児童生徒の割合が、同校種内の学年間よりも大きく低下することである。教員による校種間交流や情報交換の機会が限定的で、互いの指導内容や指導方法を学ぶ機会が十分でないことが要因として挙げられる。拠点校・協力校英語授業改善事業と各事業を有機的に関連付けながら、学びの連続性を高めるための授業改善を推進し、小中高一貫した英語コミュニケーション能力の強化を目指す。

Plan

■ 取組計画

拠点校（研修協力校）・協力校（近隣校等）における実践研究及び教員研修の推進

○ 県内の３地区に、それぞれ小・中・高の拠点校を指定
○ 協力校と連携しながら四つの研究テーマについての研究を推進
○ 小・中・高の拠点校における校種間連携の推進

■ 体制

外部講師（大学教員）、県教育委員会、市町村教育委員会等による指導・助言及び成果の普及と英語教育推進リーダーの活用

○ 授業公開・研究協議会等の開催による研究成果の発信
○ 大学教員による専門的な指導助言
○ 英語教育推進リーダーの関わりによる研究の充実

Do

■ 拠点校・協力校による研究推進

＜四つの研究テーマ＞
・英語による言語活動の充実
・指導と評価の改善
・教員の英語力及び指導力の向上
・校種間連携の在り方

■ 成果検証及び成果の普及

・英検ＩＢＡ受検による生徒の英語力検証（全県：中２～高３）
・年２回の授業研究会の開催
・県教育研究発表会における研究発表資料の公開（小中拠点校）

■ 関連研修・事業

(1) 中高連携授業改善セミナー
対象：拠点校中高英語担当教員等
・パフォーマンステストの研究
・ALTとの連携による授業改善
・マイクロティーチングの計画と実践
・TOEIC L&R IPテスト（オンライン）

(2) 高校生英語ディベート事業
対象：拠点校等の県内高校生
・即興型英語ディベート大会（8月）
・高校生e-Debate交流会（11月～12月）
※すべてオンライン実施

Check

英語教育実施状況調査における経年比較

指標内容	校種等	全国 R1	秋田 R1	秋田 R3
小中連携実施の割合（%）	小中	82.0	84.8	67.9
中高連携実施の割合（%）	中高	29.7	38.3	45.5
パフォーマンステストの実施状況・話す・書く両方実施の割合（%）	中	86.1	94.9	95.7
	高	36.4	30.9	33.6
求められる英語力を有する生徒の割合（%）中3: CEFR A1　高3: CEFR A2	中3	44.0	39.1	53.1
	高3	43.6	53.6	53.7
CEFR B2レベル以上の英語力を有する教師の割合（%）	中	38.1	29.6	34.2
	高	72.0	61.3	59.2
「話す活動」時にICT機器を活用した学校の割合（%）	中	44.0	32.1	82.6
	高	47.4	31.9	86.4

Action

県内大学等との連携強化を図り、専門的な見地から、授業改善を目指す。

令和４年度については、下記３点を重点項目に掲げる。
① 「目標ー指導ー評価の一体化」に基づく授業改善
② 教員の指導力及び英語力向上
③ 生徒の英語力向上に向けた校種間連携

なお、成果検証として、英検ＩＢＡ等の外部試験を活用する。

成果の普及

CAN-DO形式での学習到達目標リスト【秋田県公立高等学校】
https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/30273

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～秋田県藤里町立藤里小学校～

課題

1　児童の英語発話量及びコミュニケーションの場の増加
2　教員の英語発話量及び指導力の向上

具体的な取組と工夫

＜1について＞
- 英語によるコミュニケーションの必要感をもたせるための、単元と1時間ごとのねらいを意識しためあての設定
- 英語に慣れ親しませるためのCIR（国際交流員）とのSmall Talkの時間の設定
- 既習表現を児童が取捨選択して活用する場の意図的な設定
- 伝えたい内容に合った表現方法を考える学び合いの場の設定
- 児童の振り返りをフィードバックした授業展開
- ICTを活用した学習状況の見取りや評価場面の工夫
- １年生からの外国語活動の設定（1・2年生は年間20時間程度）

＜2について＞
- 全学年の専科指導（1～4年：小学校教員／5・6年：中学校教員の乗り入れ）
- CIRとのTT指導
- オールイングリッシュを目指した授業（クラスルームランゲージの設定）
- 小中の円滑な接続に向けた取組（小中合同授業研究会の実施、9年間のCAN-DOリストの検討、英検ESGの結果を中学校と共有）

3年「アルファベットとなかよし」
友だちのイニシャルを尋ね合う活動

成果1

○ 英語を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童が増えた。
○ 既習表現を使って自分の考えや気持ちを伝えようとする児童が増えた。
○ 低学年から英語に触れることで、リスニングの力が付いてきている。

＜児童アンケートの結果＞
- 「英語を使ったやり取りが楽しい」：93%
- 「4月より英語で話せるようなった」：100%

成果2

○ クラスルームランゲージの活用により、指導者が英語を使った指導に慣れてきた。
○ CIRとのTT指導を通して、英語で話すロールモデルを児童に示すことができた。
○ 専科教員が複数学年を担当することで、学年間の学習内容のつながりを意識して指導することができた。

課題及び改善案

■ 言語活動を行う際、楽しさより正しさを求めてしまった。
■ 指導方法の違いから、外国語活動から外国語科へ急にハードルが上がってしまった。緩やかな接続を心掛けた指導が必要であった。

■ 小学校段階では、伝わるかどうかという視点で指導をする。
■ それまでの指導の経緯と、児童の実態を踏まえた指導計画を立て、指導する。

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～秋田県由利本荘市立鶴舞小学校～

課題

・外国語活動・外国語の学習に対する苦手意識があり、自信がないために英語による言語活動に積極的に参加できない児童が見られる。
・提示された表現を使おうとするが、既習の表現を使って複数回のやり取りをしようとする児童は少ない。
・授業において、教師の英語力並びに英語による発話量が十分とはいえない。

具体的な取組と工夫

○ 児童の伝えたいという思いが高まるような単元の構想

・教科等横断的な単元構想
（学級活動、総合的な学習の時間、家庭科）
・自分の考えや気持ちなどを伝え合う言語活動の設定
（自分や身近な友達、家族に関わる言語活動）

○ 英語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを感じることができる学び合い

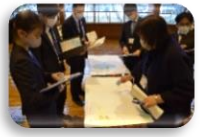
・All Englishの授業によるInputの充実
・学級の実態や単元のねらいに応じた学習形態
（ペア・グループ・フリー・出店方式など）
・掲示や繰り返しによる既習事項の活用

○ 教師の英語力並びに英語の発話量の向上に向けての体制づくり

・ALTや教育専門監との連携
・校内研修会の実施
・授業プランシートによる単元の計画
・授業プランシートへのクラスルームイングリッシュやSmall Talkの掲載

授業研究会による検証と改善

ワークショップ型での共有



授業研究会
↕
研究協議会
↕
研修通信等での共通理解・校内研修会

成果

○ 外国語活動・外国語の学習に対する意欲の向上

児童の思いを生かした単元構想や単元の展開を工夫することで、意欲の高まりが見られた。
相手意識や目的意識を大切にした課題設定をすることで、必要感をもって活動する児童が増加した。
【外国語の勉強は好きだ（5月⇒9月）】
3年　76%⇒85%　　4年　92%⇒95%
5年　98%⇒100%　　6年　89%⇒89%

○ 児童の英語による言語活動の充実

児童が話したくなる内容や興味のある内容を取り上げ、学習形態を工夫することで、進んでコミュニケーションを図ろうとする児童の割合が増加した。
【2往復は会話を続けようと努力し、進んでコミュニケーションをとっている（5月⇒9月）】
3年　53%⇒81%　　4年　93%⇒90%
5年　94%⇒97%　　6年　87%⇒98%

○ 児童の英語による発話量の向上

All Englishによる授業を推進したことでInputの量が充実し、児童の英語による発話量も増加した。相手の言葉に反応する表現や既習の表現を掲示し、繰り返し取り上げることで既習事項を活用しようとする姿が見られるようになった。
【学習した表現を進んで使っている（5月⇒9月）】
3年　59%⇒83%　　4年　97%⇒92%
5年　88%⇒97%　　6年　88%⇒97%

○ 教師の英語による発話量の向上

ALTや教育専門監との日常的な連携により、全教職員でAll Englishの授業に取り組むことができた。クラスルームイングリッシュの活用、Small Talkが充実してきた。
【英語を用いて授業を進めている】
5月：72%　⇒　9月：80%

課題及び改善案

○ 児童同士の自然な双方向のやり取り

見通しや目的意識をもてるような導入時のSmall Talk、ターゲットフレーズや既習事項を活用したActivityの時間を保障していくことで、InputやOutputを充実させていく。

○ 中間評価を生かした後半部分の展開

中間評価により、その後の児童のパフォーマンスがよりよくなっていくような手立てが必要である。児童の実態に応じた見取り、ねらいに迫るための効果的な中間評価の在り方を研修していく。

○ 教師の英語力の向上

授業展開や、児童の求めに応じた英語での臨機応変な対応が必要となる場面がある。ALTや教育専門監と協力して指導に必要なクラスルームイングリッシュや語彙を習得していく。

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～秋田県羽後町立西馬音内小学校～

課題

〈児童の実態〉 英語で聞いたり話したりすることに自信をもてず、コミュニケーションを図ることに難儀している児童がいる。
〈教員の実態〉 外国語活動・外国語に関する研修の機会が少なく、自身の英語力や指導力に不安を感じている。

具体的な取組と工夫

■ 自信をもって英語でコミュニケーションを図ることができるようになるための取組
- 教師自身も「短く、簡単に、繰り返す」を意識して既習の語句や表現を使い、児童が慣れ親しんでいけるようにする。
- 簡単な褒め言葉を意識的に活用し、教師も児童も楽しみながら自信をもって取り組んでいけるような雰囲気づくりをする。
- タブレットを使用してプレゼンテーションをしたり、児童の作品の画像を共有しながら言語活動を行ったりするなど、ＩＣＴの活用により作業を効率化するとともに、児童の英語による発話量の増加を図る。
- よさや困り感を全体で共有する「中間評価」を設け、言語活動の活性化を図る。
- 既習事項を生かしながら、自然なやり取りができている児童を賞賛し、価値付ける。

■ 教師の英語発話量増加についての取組
- 教育専門監や外国語専科教員、ALTとの連携による外国語活動・外国語担当教員のスキルアップのための研修を設定する。
- VTRによるHRTの英語発話量の検証をする。（7月、11月、2月）

成果

■ 児童の英語でのコミュニケーション場面の量や質の充実を図ってきたことで、言語活動時間の増加とともに、既習表現を活用したり、できるだけ英語を使ってやり取りしたりしようとする意識が高まった。
- 外国語活動・外国語の学習･･･「とても楽しい」　8月61.9%→12月76.8%
- 楽しみにしている活動･･･「友達とのやり取り」　8月38.1%→12月56.2%

■ 教育専門監や外国語専科教員と連携し、英語による既習表現の積極的な活用を意識することで、HRTの英語発話量の増加につながった。
「All Englishを目指して授業を進めている」　8月2.5→12月3.8（４段階中）

課題及び改善案

■ 活動に必要な表現を練習しすぎたり、型にはめたりせずに、児童に思考・判断・表現させる機会を大切にする。

■ 外国語専科教員配置により、外国語活動・外国語の授業を行っていないHRTが多いため、研修したことを実践に結びつけることが難しい学年があった。実際に外国語活動・外国語の授業を行うことができないHRTのための実践の機会を保障していく必要がある。

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～秋田県藤里町立藤里中学校～

課題

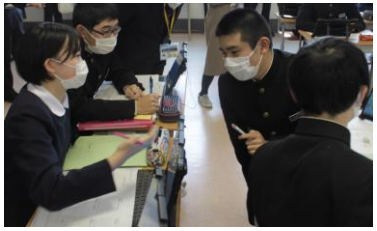
・話すこと（文の組み立て方・語彙）への苦手意識をもつ生徒が7割いるため、目的が明確な言語活動を通して話す力を高める。
・4技能の中で、書くことの自己評価が一番低いため、抵抗感を軽減し、書く力を育成する。

具体的な取組と工夫

■ 取組1：帯活動での言語活動
・当番生徒による挨拶とQ＆Aを毎時間行うことで、基本的な表現の定着につなげる。
・テーマに沿ってペアで2分間やり取りすることで即興性を養い、書く活動と組み合わせて正確性を身に付ける。

■ 取組2：debate による言語活動の充実
・トピックについて、brainstormingすることで、主張、根拠、反論を整理しdebateに備える。
・賛成・反対・judgeに分かれて、それぞれの立場で主張し合う。judgeは評価の観点に基づいて判定する。
・debateでの話合いを基に、自分の意見を根拠や具体例を挙げて書く。

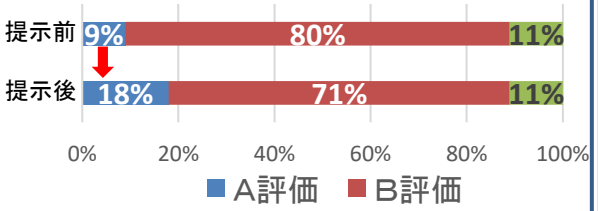
■ 取組3：小中合同授業研究会による、授業改善
・第1回授業研究会（7月9日）Unit 5 A Japanese Summer Festival (NEW HORISON English Course 1)
・第2回授業研究会（11月19日）Stage Activity 3 Let’s Have a Mini Debate (NEW HORISON English Course 3)



成果

■ テーマに沿ってペアで話す活動を繰り返し、書く活動を組み合わせることで、表現の定着につながった。
■ 話す活動の前に、brainstormingでアイディアを出し、考えや根拠を整理することで、発話量の増加につながった。
■ judgeをする際に、評価の観点を提示したところ、聞く態度がよくなった。また、聞く側に何を求められているのかが明確になり、話す量が飛躍的に増加した。
■ 小中の連携により、英語科における中一ギャップを軽減する課題を見付けられた。

＜評価規準の提示前と後のパフォーマンスの結果＞



※評価規準提示後に、A規準の生徒が9%増加した。

課題及び改善案

■ 生徒による発話量の増加に伴い、書く分量が増え、抵抗感が軽減されたが、文構造や綴り等にまだ課題が見られる。流暢に話す力と正確に書く力の両方を上げることが必要である。
■ ペアやグループで言語活動をすることで、全体としての発話量が増加したが、個々の発話量の保証と評価の仕方を今後研修していく。

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～秋田県由利本荘市立本荘南中学校～

課題

「英語を話せるようになりたい」という思いがありながらも、語彙や表現が不足し、会話を継続するためのスキルが不十分なため、「話すこと」に対して自信 のない生徒が多い。そのため、自分の考えや気持ちを伝え合う活動を充実させ、生徒が自信をもって自然なやり取りができるように授業改善に取り組む必要がある。

具体的な取組と工夫

■ 英語による言語活動の充実
- 生徒の興味・関心を引きつけるコミュニケーションの目的や場面、状況等の設定　・実際に考えや気持ちを伝え合う時間の保障
- 中間評価（Solution Time）の設定　・単元ゴールに向けた帯活動の設定　・オンライン会議ツール（Zoom）を活用した海外交流
- 教科書の題材をベースとした4技能5領域のバランスを意識した指導

■「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標を活用した授業改善
- 鶴舞小学校と連携したCAN-DOリストの作成と活用
  → 生徒への配付、学習室への掲示、振り返りカードや定期テストの範囲表への明記

■「即興で話すこと」及び「ALTを活用したパフォーマンステスト」
- 単元終末に「ALTを活用したパフォーマンステスト」を実施　・評価規準の検討とそれを基にしたRubricの設定、明示

■ 校種間連携
- 小学校時における学びの確認　・小中合同指導案検討会　・小学校、高等学校の授業研究会、協議会への参加

■ 英語担当教員の英語力、指導力向上に向けた取組
- 各種研修への参加（国際教養大学教授の講座、評価に関するオンライン研修、教育課程研究協議会、秋田英語英文学会等）
- TOEIC受験、英字新聞購読

成果

■ 生徒の英語学習に対する意欲の向上（授業アンケート9項目中8項目で改善）
- ○「学習課題やめあてを意識して授業に臨んでいる」　87.6%（7月）→ 97.9%（12月）
  - ・コミュニケーションの目的や場面、状況等を明確にするように心掛けたことによる効果
  - ・CAN-DO形式の目標提示による意識向上
- ○「先生や友達の意見を基に、よりよい方法や考え方を取り入れようとしている」　86.4%（7月）→ 96.9%（12月）
  - ・生徒同士の表現の学び合いや振り返りの充実による効果

■ ALTを活用したパフォーマンステストの充実
- ○ 授業アンケートの自由記述において、「英語で話すことが楽しい」との記述の増加
  - ・スモールステップによる生徒の自信や達成感につながる指導の効果

■ 基礎学力の定着
- ○ 県学習状況調査において、1、2年生ともに県平均通過率を上回る
  - ・ 県平均通過率との比較　1年生　＋3.5　　2年生　＋6.2

課題及び改善案

■ 目的や場面、状況等に応じて見方・考え方を働かせ、既習事項を活用してコミュニケーションを図ることができる生徒の育成
→ 思考力を高める学習課題や言語活動の工夫について研究する。

■「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の見直しと活用
→ 小学校での学びを再確認し、学習到達目標を見直すとともに、生徒が見通しをもったり、自分の変容を振り返ったりするためのより効果的な活用の仕方を検討する。

■ 単元ゴールの設定、中間評価・パフォーマンステストの評価の在り方の研究
→ 教科部内で積極的に研修機会を設定し、パフォーマンステスト等の評価方法や評価規準について検討する。

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～秋田県羽後町立羽後中学校～

課題

1　即興の場面で自分の考えを伝えることを苦手としている生徒が多い。
2　根拠や理由を明確にして、説得力のある伝え方ができる生徒が少ない。

具体的な取組と工夫

■ 教科部としての授業改善に向けて
- 月例の教科部会を開催し、前月の授業実践の振り返りと次月の取組の確認を行う。
- 英語科教員内で互いに授業を参観し合い、授業改善を行う。
- 年2回の公開授業研究会を実施し、授業改善に取り組む。
- 小学校、高校の授業を参観し、つながりを意識した指導と授業改善を行う。

■ 即興で話す力の向上に向けて
- 毎時間授業の始まりの5～10分でSmall Talkを行い、即興で話すことに慣れさせる。
- 会話の後で中間評価を行い、言いたかったが言えなかった表現等を全体で共有し、ペアを換えて再度会話させる。
- 対話の際に活用する「便利表現集」を作成し、困ったときの拠り所とさせる。

■ 理由や根拠を明確にした、説得力のある話し方の定着に向けて
- クラゲチャートなどの思考ツールを活用し、考えをキーワードで整理させてから話す活動を設定する。
- 教師側からの情報提示を最小限にし、生徒が質問をしなければ必要な情報が得られないような場面を設定する。
- 相手に質問をして得られた情報を使って助言をしたり、自分の考えを述べたりするような場面を設定する。
- 話した内容についてまとめとして書く場面を設け、思考を整理させて次回以降の会話につなげるようにする。

▼Small Talk の様子

▼相手に質問し、情報を引き出す様子

成果

■ 即興で話す力の向上について
- 即興的な場面でも、自分の考えを伝えることができる生徒が全体として増えた。

■ 理由や根拠を明確にした、説得力のある話し方の定着について
- 他教科等で得た知識や自身の経験などに触れ、根拠や理由を伝えられる生徒が増えた。
- 相手の状況に応じて、そのもののジャンルや様態などの説明をしようとする生徒が増えた。

【生徒質問紙より】

▼「即興で話すことが得意である」

	７月	１２月
１年生	２５％	２５％
２年生	２２％	４２％
３年生	１７％	１８％

▼「理由や根拠を明確にして話すことができる」

	７月	１２月
１年生	３．０３	３．４１
２年生	２．６１	３．５８
３年生	３．４５	３．６２

5（とてもよくできている）4（できている）3（どちらとも言えない）2（あまりできていない）1（できていない）

課題及び改善案

■ 一人一人の発話量を確保するための学習形態の工夫
- ALTと１対１による対話やペア、トリオ、グループなどの様々な形態によるやり取りを通して、生徒の発話量を増やし、会話の質の向上を図る。

■ 会話における正確さの向上
- 間違いを許容する雰囲気で授業を行い、即興の会話に前向きに取り組める生徒が増えた。一方で、主語と述語の誤りがある発話をする生徒もおり、正確さに意識を向けた指導もバランスよく組み合わせる。

■ 自分が本当に伝えたいことを的確に伝えるための語彙力と表現力の向上
- 授業の中で語彙や定型表現の指導を組み込む。

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～秋田県立大館鳳鳴高等学校～

課題

生徒の英語による言語活動が十分に行われていない。（公立学校等における英語教育実施状況調査等）

→ティームティーチングの工夫や言語活動計画の見直しを通して、生徒の言語活動の充実を図る。

→ディベートを中心とした言語活動の指導方法を研究し、より系統だった指導を行う。

具体的な取組と工夫

■ 言語活動計画の見直し：これまでの取組を整理し、英語科共通の取組として、各学年の言語活動の流れを次のように計画した。

◎ １年生：①プレゼンテーション　②ディベート　③パラグラフライティング

◎ ２年生：①プレゼンテーション　②ディベート、ディスカッション　③エッセイライティング

１年生は「ある話題について理由を添えて論理的に意見を述べる」こと、２年生は「意見を述べる」ことに加えて「議論を通して立場の違う人と交渉し、妥協点を見つけて合意に達する」ことを目標に設定した。

授業研究会の様子

■ 公開授業研究会の実施

研究主題「ディベートを活用した指導と言語活動の評価」

◎ 第１回授業研究会（９月２１日）

１年生ディベート「理由や具体例を提示して、より説得力をもたせて意見を述べる　：トピック　We should live in undersea cities in the future.」

◎ 第２回授業研究会（１１月２１日）

２年生ディスカッション「Paternity Leave 取得を可能にするCompromise Plan を作成する」

秋田大学、県教育委員会、市町村教育委員会、近隣の協力校からの参加、指導を頂いた。

成果

■ ディベートやディスカッションがスムーズにできるようになり、生徒の言語活動の割合が４３％増加した。（公立学校等における英語教育実施状況調査等）

■ 簡単な活動から比較的高度な活動への段階を踏んだ指導や、１年生から２年生への一貫した指導が可能になった。

■ 民間模試学力要素別分析「思考力・判断力・表現力」が向上した。

１年生７月→１１月（全国平均比-0.6→＋6.1）

２年生７月→１１月（全国平均比+6.1→＋6.2）

課題及び改善案

■ 従来のCAN-DOリスト形式での生徒の自己評価に加えてディベート活動の自己評価、教師による評価を行っているが、限られた授業時間内で生徒の活動時間を確保するには、こうした評価もより効率的に行う必要がある。今後、CAN-DOリスト形式で設定した学習到達目標と、ディベート活動の目標や評価を統合させる必要がある。

■ パフォーマンステストについても一定の形を設け、言語活動を評価していく必要がある。

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～秋田県立新屋高等学校～

課題

他者の意見に耳を傾け、対話を深めながら最善策や解決策を導き出すことを苦手とする生徒が多い。

具体的な取組と工夫

研究テーマ：「批判的思考力」を伸ばす英語表現活動の工夫

公開授業研究会の様子

具体的な取組と工夫

① 各レッスンのトピックに関して自分の考えをスピーチする活動やリテリングを行う。

② ディベートの要素を取り入れたペアワークや グループ活動を積極的に取り入れ、生徒の英語による言語活動量の増加や批判的思考力の醸成を図る。

③ 年間2回の公開授業研究会を実施し、英語担当教員の指導力向上や授業改善に取り組む。
（第1回　7月6日　参加者16名　　第2回　12月17日　参加者　21名）

④ Chromebookを活用した授業に各教員が取り組み、英語に苦手意識がある生徒でも達成感を得られる授業を実践する。

成果

公開授業研究会実施クラスへの授業アンケートから

① ディベートの要素を取り入れた表現活動はあなたの英語力の向上に役立ちましたか？
「役立った」「どちらかといえば役立った」と回答した生徒→ 88%

② 「役立った」「どちらかといえば役立った」と回答した生徒に質問します。どのような点が向上したと感じていますか？
間違いを恐れず自分の考えや意見を発信するようになった→ 58%
相手の考えや意見をしっかり聴くようになった→ 63%

課題及び改善案

① ディベート活動の更なる充実
- 正確性や論理性を高める工夫
- 語彙力強化によるやり取りの充実

② 段階を踏んだ年間指導計画の作成と評価方法の工夫
- 3年間を見通した指導計画の作成
- CAN-DOリストの見直し

③ 英語科教員の授業力向上
- ディベート活動のアイデアの共有

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～秋田県立湯沢高等学校～

課題

英語で自分の意見・理由を論理的に伝える力が十分身に付いていない。

具体的な取組と工夫

■ 年2回の研究授業
・校内研究会（7月16日実施、協力校から参加）　授業者　三浦　　亮（対象クラス：2年E組）
・公開研究会（11月5日実施、協力校、地区内の小中拠点校から参加）
授業者　古瀬　利彦（対象クラス：1年C組）
■ TTの授業におけるディベート活動（通年、1，2年全クラス）
■ 教科書本文の内容に対するエッセイライティング（2年、論理的記述力をディベートに生かすため）
■ 教科書本文の内容に関連したトピックについて自分の意見を書くライティング活動
（1年、タブレット活用、トピックに必要な語彙と相手に伝わる構文の習得のため）
■ 授業のウォームアップとしての会話活動（1年、上記のライティング活動のテーマで、英語を見ないでペアで会話、伝わる英語を用い即興性も高めるため）
■ 高校生英語ディベート推進事業への参加
・即興型英語ディベート大会（8月4日）　1～2年から2チーム参加
・e-Debate交流会（11月22日）　1年から1チーム参加
■ 中高連携授業改善セミナーへの参加（7月1日、会場　総合教育センター）　参加者　三浦　　亮

11月研究授業の様子

成果

■ 英語での会話能力、英語の語彙力、論理的思考力などの向上
1年139人へのアンケート調査の結果（複数回答有り）
Q.「今年度英語ディベート活動に取り組んだことにより向上したと思う能力」は？
A.（1）英語で意見や理由を伝える能力（66.9%）
（2）英語で意見を書く能力（63.3%）
（3）相手の英語を聞く能力（64.7%）
（4）論理的思考力（21.6%）
（5）英語の語彙力（43.9%）
（6）その他の能力（3.6%）：チームで意見を構築する能力、発音の技能など
（7）どの能力も向上しなかった（0.7%）

課題及び改善案

■ 課題：英語を即興で話す力が不十分

■ 改善策：準備をさせてから話させることと、即興で話させることをバランス良く織り交ぜた活動の継続（accuracyという基盤を築きつつ、improvisationまたはfluencyを高める）